

特集 世界につながる埼玉

芸術編

盆栽で平和な心を広げたい

大宮盆栽村「蔓青園」四代目園主 加藤初治さん



アメリカで行われた盆栽展覧会で

盆栽愛好家の思いは万国共通

盆栽は生きた芸術「BONSAI」として世界中に多くの愛好家を持っています。私も毎年5か国以上訪問し、現地で盆栽の剪定法や育て方などの普及促進を行っています。盆栽は口はききませんが、焦らずじっくり愛情をかけて育てていくと、その木が何を欲しているか、こちらがどうしたらいいのかわかるようになります。盆栽を見ていると“木”から“気”をもらい、穏やかな気持ちになるのです。

平和を感じる心と美しさを楽しむ気持ちは世界共通で、言葉が通じなくても盆栽を愛する者同士は気持ちが通じ合うものです。私は盆栽を通じて相手を理解しようと常に心がけています。

盆栽のこれからに思うこと

海外のイベントに参加していて気づいたことがあります。盆栽は日本の伝統文化ですが、その国々の風土や民族性に合った作品はどれも魅力的で見ている人を楽しませます。盆栽は1つの鉢の中に自然の風景が再現される芸術作品です。形にこだわるのではなく、その国に合った植物で造るなど、私は盆栽を外国人にも日本人にももっと身近に感じて楽しんでほしいと思っています。

2017年4月にはさいたま市で28年ぶりに世界盆栽大会が行われます。私はこれからも世界の人々に盆栽の良さを伝え、皆が笑顔で交流しお互いを理解し合える“平和な心”を広げていきたいと思っています。



加藤さん(右)とアダム・ジョーンズさんと名品の盆栽

自分の盆栽園で国際理解の橋渡しを

「蔓青園」で修行5年目 アメリカ出身 アダム・ジョーンズさん

学生の頃から美術が好きだった私は、「自分で創り、鑑賞し、育てる」といったまさに“生きた芸術”である盆栽に大きな魅力を感じていました。アメリカにいた頃は時々ホームセンターで植木を買ってきては自己流で盆栽を作っていました。次第に本場の盆栽を見たい気持ちが強まり、約6年前に埼玉にやって来ました。日本語が分からず英語で質問する私に蔓青園の方たちは英語で説明してくれました。その後「蔓青園」に弟子入りし、盆栽の技術だけでなく、日本の伝統の盆栽に根付いた精神についても学んでいます。

私は将来日本で自分の盆栽園を持ち、「日本語や日本文化は難しい」と思っている外国人に対して、盆栽を通じて日本文化理解への橋渡し役になりたいと思っています。

留学での経験を音楽に生かして

ベルギー・ブリュッセル在住 折原麻美さん(2013年度「埼玉発世界行き」奨学生)

音楽留学で気づいたこと

私が専攻する『ヴィオラ・ダ・ガンバ』は15世紀から18世紀にかけて宮廷の貴族たちに愛好された弦楽器です。私は「世界を知りたい!」という思いから、この古楽器の教育原点があり、外国人住民の割合が70%を超えるベルギーの首都ブリュッセルを留学地を選びました。

音楽の勉強もそうですが、私が留学生活で一番時間を費やしたことは、自分自身と向き合うことです。「あなたはどうか考えるのですか?」「私はこう考えます」というタイプの問答に慣れていない、と気が付いたのは留学して間もないころでした。日本では曖昧に答えて相手に合わせてみたり、何も言わなかったりすることで済んでいたことが、こちらではそうはいきません。自分が何を思っているのかをはっきりと人に伝えられるようになるまで、相当な年月を要しました。良い仲間達の助けも大きかったです。自分のことをよく理解し、人に気持ちを伝えられるようになることで、音楽も説得力のあるものになることを学びました。

音楽を通じて国際交流を

生まれ育った埼玉県には思い入れがあります。ベルギーで出会った私の友人たちは皆日本が大好きです。いつか彼らを連れて埼玉県でコンサート、さらには国際交流を目的とした音楽イベント等、人がワクワクできることを実現させたいです。



コンサートのためのリハーサルの様子



ブリュッセル議事堂で行われたコンサート

歌舞伎の魅力を広く伝えたい

フィンランド出身 ビュールク・トーヴェさん(埼玉大学准教授)

歌舞伎の魅力

約14年前、私は初めて日本語を目にし、日本語に強い興味を持ちました。その後猛勉強の末日本に留学しました。しかし日本に来た当初は友達もおらず日本語を使う機会はありませんでした。危機感を覚えた私は大学の演劇部に入学。いつの間にか日本語も、演劇の楽しさも知りました。その様子を見ていた教員に「君は芝居が好きなら、『二代目市川團十郎の日記』を研究してはどうか」と勧められたのが歌舞伎に入り込んだきっかけです。

日記を読み進めるにつれ、江戸中期の歌舞伎役者の日常や歌舞伎劇場の経営、また舞台制作の方法が目の前に浮かびました。現代の歌舞伎は常に時代に合った新しいものを取り入れながら人々の関心を引くことに重きを置いて、そこに大きな魅力を感じました。また、豪華絢爛な衣装や鮮やかな色彩の小道具、舞台装置、また、和楽器の生演奏など、歌舞伎は視覚的にも聴覚的にも楽しませてくれるまさに「総合芸術」で、この魅力をもっと発信したいと思うようになりました。



二代目團十郎の口上の絵を持つ
ビュールク・トーヴェさん

歌舞伎を通して日本文化の良さを伝えたい

私は歌舞伎への理解を深めるため、8年ほど前から、花柳由美千乃師匠の指導を受けて、日本舞踊を勉強しています。独特のしきたりや礼儀作法など、なかなか理解しがたいですが、自身が体感したことを学生に伝え、歌舞伎や日本文化に親しみを覚えてほしい。そして学生たちが歌舞伎についての理解を同世代の人達に話し、広めてほしいと思っています。

歌舞伎をまだ見たことがないという方はぜひ一度見てほしいです。わからないから見ないのではなく、わからないからこそ興味を持って一歩未知の世界を覗いてほしいのです。そして新しい発見を楽しんでほしいです。



長唄「助六」を国立劇場小劇場で披露